

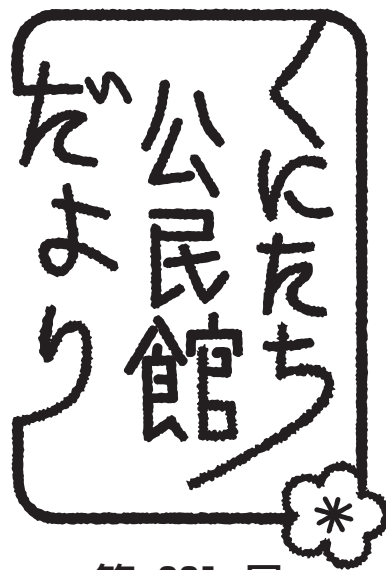
平和講座 (2016年7月8日、22日実施) 講演要旨

ドイツの歴史教育

—ナチ時代をどう伝えていくか—

講師 川喜田敦子 (中央大学)

戦後71年、日本では戦争を体験していない世代が人口の8割を超えています。ドイツではナチ時代をどのように次世代へ伝えてきたかお話を伺い、過去とどう向き合うかを考えました。



第 681 号

2016年11月5日

(平成28年)

侵略戦争と暴力支配

第二次世界大戦の時代を日本で振り返る時、我々は「戦争の時代」として振り返ります。ドイツの場合、あの時代は「ナチズムの時代」です。そこでは、戦争だけでなく、少数者や反対者に対する迫害の問題も大きく意識されることになりました。つまり、侵略戦争と暴力支配という2つの問題を同時に考えることになるのです。

ヨーロッパにおけるユダヤ人、ユダヤ教徒に対する迫害の歴史は長いのですが、今回は1933年にナチが政権をとった後の話をします。

どういうかたちで、ユダヤ人の命は奪われていったのか。1つはゲットーです。強制的にユダヤ人だけを隔離して住まわせたものです。人口密度が大変高く、食料もないので

発行
国立市公民館
〒186-0004
国立市中1-15-1
TEL 042-572-5141
FAX 042-573-0480
休館日：毎週月曜日



講演で使われた歴史教科書「こんな時代だった」

慢性の栄養失調や伝染病の流行などで死亡率が1割を超えることもありました。もう1つは、ウクライナやバルカン半島など、東部戦線の住民の大量射殺です。独ソ戦の開始後、1941年の秋になると、いわゆる絶滅収容所という人を集めて殺すための施設がつくられはじめます。一番有名なのがアウシュヴィッツビルケナウです。ゲットー、東部戦線の大量射殺、絶滅収容所を合わせると、ナチが支配したヨーロッパで殺害されたユダヤ人の数は、概算で600

万近くに上ります。

歴史教育はナチズムをどう伝えるか

ドイツは、将来の進路に合わせて教育年数の違う3つの学校タイプに分かれています。ギムナジウムという大学進学者向けの学校でどのような教育をしているかについてお話しします。大学に入るまでに12年間の教育課程がありますが、7年生（日本では中学1年生）で歴史教育が始まります。そこから4年間かけて古代から現代までの通史を学んでいき、ナチズムに入るのは4年目の10年生です。中等段階の最後の学年が、ナチズムを含む現代史を習う時期になります。

実際に使われている教科書の中身を見ていきましょう。今日お見せするのは、『こんな時代だった』というタイトルの教科書です。最初にやはり、ユダヤ人大量殺りくの問題をどう書いているかを見ておきましょう。ユダヤ人を絶滅するという演説をヒトラーが国会で開戦の年にしたこと、当時は「ユダヤ人の絶滅」という言葉ではなく「最終解決」という言い方をしたこと、アウシュヴィッツで工場のように産業化された殺害が行われたこと、ユダヤ人も抵抗したことな

どが非常に細かく書かれています。あとは、いわゆる強制収容所です。体制に反対する人を拘束したり、強制労働させた施設を「強制収容所」と呼んでいます。全部合わせると、ドイツの国内だけでも千を超える数がありました。それに加えて絶滅収容所がポーランドにもあったことを示す地図、アウシュヴィッツビルケナウに到着して、列車から降ろされ選別を受ける様子や、その選別でガス室行きと決まった人たちがそちらに向かって進んでいく様子を写した写真がこの教科書には出ています。

ドイツの教科書には、説明の文章のほかに、地図や写真、さらに史料まで全てが入っています。日本では史料は別冊だと思われていますが、ドイツでは全てが一冊に入っています。

ナチズムの歴史を再構成するときに、ドイツの歴史学はずっと、ドイツ側の残した史料で書いてきました。当時ドイツで使われていた言葉で現象を語ることもありました。たとえば1938年11月、ユダヤ人に対する集団的な暴行（ポグロム）が発生しました。日本でも「帝国水晶の夜」と習った方がいるかもしれません。ユダヤ人の店舗が壊され、ショーウィンドーが割られる。そのガラスが路面

に落ちて、星の光に反射してきらきら光る。それが何で「綺麗」なんだろうということからそう呼ばれるようになったものです。しかし、そんな加害者側の言葉でナチズムの歴史を教えていいのかという問題があるわけですね。教科書に載せる史料も同じです。加害者側の残した史料だけでは、加害者の言葉で歴史を語るようになってしまいます。そのような問題意識から、今では、アウシュヴィッツの生存者など被害者側の証言も載せられるようになりました。

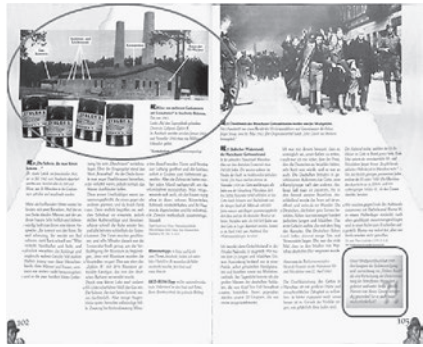
近年の変化

忘れられた被害者への注目

ここ数年の教科書の変化としては、ナチ犯罪に関して、ユダヤ人以外の被害者が取り上げられるようになったことがあります。マイノリティーの迫害の話をするとき、ユダヤ人以外の被害はなかなか顧みられないという時代が長く続いたのですが、この10年ほどで2つの犠牲者集団の扱いが目に見えて向上してきています。

1つ目はロマ(ヨーロッパを中心に、南・北アフリカなど世界各地で生活する少数民族)に対する迫害です。ロマに対する迫害は、ヴァイマル時代(1919年～1933年)にはユダヤ人に対する

歴史教科書「こんな時代だった」より、ユダヤ人の大量殺りくについて書かれたページ



迫害よりもよほど強いものでした。

ロマの犠牲者の総数は、教科書では50万人と書いているところが多いのではないかと思います。犠牲者数には20万人から50万人まで諸説ありますが、史料が残っていないため、数値は明確化できません。

2つ目としては、いわゆるしょうがい者の安楽死という問題があります。ナチの人種主義は、自分たち以外の人種を下に見て迫害しましたが、自分たちの内部で優れていないものを切り落として、集団自体の質を高めていくという思想ももっていました。優生学と呼ばれるものです。この考え方に基づいて、ドイツでは、健康でない、価値が低いとみなした人たちを安楽死させるという政策が行われました。しかし国内での反対の声が

抑えられなくなってきた、1941年秋で一旦中止されます。この後、国内で安楽死作戦に携わり、いろいろな殺害のメソッドを持っていた人たちがポーランドに移るわけです。そこで今度はユダヤ人を対象とした殺害施設や方法の開発に当たりました。ここには明確な方法上の連続性と人的な連続性が見てとれます。その意味でも安楽死作戦は非常に大きな問題であるということになります。国内で一旦中止された後も、この作戦は秘密裏に細々と継続されていくことになりました。一番大きかったのがハダマーという町の施設でしたが、そこは今、記念館になっています。この教科書には、安楽死作戦の説明と資料を載せたコーナーがあり、「過去から学ぶ、未来のために保存する」というタイトルが付けられています。この言葉は、その記念館のスローガンから引用されたものです。

歴史の学び方

ドイツの歴史の教科書を見ると、学校の授業で学ぶ「歴史」が、学問としての「歴史学」につながっていくことが実感しやすいかたちでつくられているなど思います。

歴史学の最前線の議論を教科書に載せているのはその一例です。

また、この教科書には、ナチの政権掌握を扱った節のすぐ後に、「文書館で調査してみよう」というコーナーが設けられています。そこには、ドイツでは町のレベルでも州のレベルでも文書館が整備されていますが、町の文書館では、あなたたちの町で、ナチの政権掌握がどういうふうに進んだかを調べることができるんですよ、と書かれています。まずは本を読み、既存の文献で概観を得る。その次は、文書館で日記や写真、いろいろなタイプの史料にあたる。史料は全部ナンバリングされているので、その番号を控え、その史料を書いた人がどういう人で、どういう政治的な立場にあつたかということを書きさんと調べましょう、とも書いてあります。そして最後、文書館調査の成果を展示したり発表したりしてみましよう、となっています。日本の歴史教育とはやはりずいぶん違いそうですね。

ドイツの被害をどう伝えるか

教科書の記述の内容に戻ります。今日の教科書には、ユダヤ人の迫害と殺害については十分に詳しい説明があり、史料も被害者側の視点と加害者側の視点のバランスがとれるようになりました。その意味で、ユダヤ人の迫害と殺害の記

述については、近年、これといって論争的な点はないと言ってよいでしょう。

それに対して、ドイツの被害体験をどう伝えるかというのは、もう少し難しい問題をはらんでいきます。

第二次世界大戦に関連するドイツの最大の被害は何かと言われた場合、拳が打ってくるのは「追放」ではないかと思えます。これは国境問題とも絡む問題です。第二次世界大戦後、ドイツの東部領が、ポーランドとソ連に割譲されることになりました。そのドイツ東部領、さらにはかつて神聖ローマ帝国だった頃にドイツ人が東方植民した地域も含めて、東欧一帯に住むドイツ系住民が全部まとめてドイツに向けて追い戻されることになりました。これが、ドイツ語で「追放」と呼ばれる出来事です。ドイツにたどり着いた人だけでも1200万人という数でした。追われてくる人たちは財産をあらかじめ没収されたうえで、列車に乗って移動したり、馬車で移動したり、ひどい時は歩いて来るわけですが、その道中、かつて自分たちが占領して虐げてしまった国の人々から報復を受けるわけです。寒さや飢えて衰弱したり、たくさん死者が出たり、女性は本当にひどい強姦

の被害に遭いました。

実際に追放され、こういう体験を持つ人が、どんなひどい目に遭ったかをいくら言葉にして証言しても、それが個人の記憶であり、個人の語りであるならば、ポーランドも文句は言わないと思うのです。しかし、たとえば歴史教育のなかで、ドイツが国としてそういう過去のふり返し方をするようになる、やはりポーランドとしては穏やかではありません。大戦全体を通じて見たときに、加害と被害のバランスがどうなっているかが問題になってくるわけです。この問題はまだまだ完全には解決していません。

戦争犯罪をめぐる認識の変化 —1995年と2013年—

さて、ここまで、ドイツの歴史教育における加害と被害の伝え方についてみてきました。最後に、教室の中での歴史教育の実践から少し視野を広げて、今日のドイツ社会における歴史の継承について見ておきましょう。

2013年、ドイツの公共放送で3夜連続で放映され、話題になったテレビドラマがありました。『ジェネレーション・ウォー』というタイトルでDVDが日本語でも出ています。舞台は第二次世界大



全2回、とても活発な意見交換が
出来ました

戦期のドイツ、焦点を当てたのは東部戦線。主人公は5人、いずれも若い人で、国防軍の将校、志願して野戦病院の看護師になる女性、ドイツ・ユダヤ人の青年などです。

ドイツでは放映当初から好評で、批判的な論評は例外的でした。そのことがもつ大きな意味は、ドイツでこの時期とこの地域がどういうふうにかかれてきたかを考えることで明らかになります。1995年、非常に話題になった歴史展示がありました。「国防軍の犯罪」展です。東部戦線における親衛隊(ナチ党組織)の蛮行は知られていましたが、正規軍である国防軍の戦争犯罪を取り上げたこの歴史展示は、世論に大きな衝撃を与えました。展示の是非をめぐって国会でも議論になったくらいです。

ことになりますと、自分の父親は、自分の夫は、という話になってくるわけです。ドラマに話を戻すと、この作品では、実は、国防軍の犯罪行為がかなりはつきりと描かれています。ドイツの歴史家も、その点でこのドラマを高く評価しています。「国防軍の犯罪」展の時期には散々議論になりましたが、それと同じ内容を描いても、今回のドラマが好意的に迎えられたことを見ると、1995年から2013年に至るまでの約20年間に、東部戦線に関するドイツの一般的な認識がどれだけ変わったかが明確に分かります。

現在のドイツの歴史認識

しかしこのドラマは、ドイツでの放映後すぐにポーランドで、その後、アメリカ、イギリスでも放映されましたが、ポーランドでの放映直後、ひどく批判されました。アメリカでの放映後も、ニューヨークタイムズに批判的な評が出ました。国内外で評価が二極化したことになりました。いったい、どこが問題だったのでしょうか。

このドラマは「普通のドイツ人」を描いていて、逆に確信的なナチを描こうとはしていません。最終的には主人公5人全員がナチ体制

の犠牲になるか、でなければ、ナチ体制から距離をとるようになりまます。その点が、「このドラマではナチの連中は我々の父でもなければ、母でもない。だれかほかの人でしかない」という批判を受けました。ナチは常に他者であり、ドイツ人はむしろ犠牲者として描かれているというのです。

しかしこのドラマは、ドイツでの放映後すぐにポーランドで、その後、アメリカ、イギリスでも放映されましたが、ポーランドでの放映直後、ひどく批判されました。アメリカでの放映後も、ニューヨークタイムズに批判的な評が出ました。国内外で評価が二極化したことになりました。いったい、どこが問題だったのでしょうか。

このドラマは、家族の語りを意識することで、メディアを通して作られる公共空間の中に、私的な空間の語りを持ち込んだといえるでしょう。そのかい離を海外メディアは問題視したのです。この点については、少数ながら、ドイツ国内からも批判の声が上がりました。ナチズム全般、特にユダヤ人の問題は、ドイツでは非常にセンシティブな問題です。それをどう語るかについては、驚くほどの制約があります。社会として語り方が決められていて、必ずそれに合わせた語り方がされます。政治家の演説から教科書の記述まで、同じことです。日本では、過去の問題をどう考えるかというときに、表現の自由が強く言われてきました。ドイツの場合、たとえばナチ犯罪を否定する発言は、表現の自由の範囲外であるという姿勢を強く見せます。

〈くにたちブッククラブ 言葉のとげ、境界にたつ文学〉

室生犀星『蜜のあわれ』

〔『蜜のあわれ・われはうたえどもやふれかふれ』所収、講談社文庫〕

講師 金井 景子 (早稲田大学・日本近代文学)

とき 11月10日(木)夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館☎(572) 5 1 4 1

※この講座はあらかじめ作品を読んできて、参加者が読み出しあいます。そのあと講師のお話を聞きます。

予告 野坂昭如『アメリカひじき』

〔『アメリカひじき・火垂るの墓』所収、新潮文庫〕

講師 大野 亮司 (亜細亜大学・日本近代文学)

とき 12月8日(木)夜7時～9時



ロシアを知る

「ソ連」という特異な国は「ベレストロイカ」を経て社会主義体制から離れ、1991年末には国家そのものが解体しました。現代の旧ソ連諸国のうち最大のものがロシア連邦です。近年では、ソチ五輪、ウクライナ危機とクリミア編入などといったできごとが記憶に新しいかもしれません。そのロシアは同時に、文学やバレエなど芸術が盛んな国でもあります。歴史・文化芸術の視点からロシアの政治や社会を読み解きましょう。

第1回は歴史概観を軸に、第2回はロシアバレエと政治の関係を、第3回は昨年ノーベル文学賞を受賞した旧ソ連・ベラルーシ出身の作家アレクシエーヴィチなど現代ロシア文学から考えます。

第1回 「ロシア／ソ連とはどういう国か」

講師 塩川 伸明 (東京大学名誉教授・ロシア政治史)

とき 12月9日(金)夜7時～9時

ところ 公民館 3階講座室

第2回 「政治とバレエ」

講師 村山 久美子 (早稲田大学・ロシア舞台芸術史／舞踊評論家)

とき 1月8日(土)昼2時～4時

ところ 公民館 地下ホール

第3回 「現代ロシア文学」

講師 沼野 恭子 (東京外国語大学・ロシア文学)

とき 1月14日(土)昼2時～4時

ところ 公民館 3階集会室

定員 30名(全回参加できる方優先、申込先着順)

申込先 11月17日(木)朝9時～
公民館☎(572) 5 1 4 1

〈図書室のつどい〉

怖いクラシック

講師 中川 右介^{ゆうすけ} (編集者・作家)

クラシック音楽というと、心安らぐ美しい旋律が思い出されるかもしれませんが、しかし、稀代の音楽家たちはさまざまな「恐怖」と闘いながら、その「恐怖」を音楽にし、その「恐怖」こそがクラシックの本道であると中川さんは言います。モーツァルトには絶対唯一の「父」が存在し、ベートーヴェンは「難聴」を抱え、ショスタコーヴィチはスターリン体制の下、命の危険に脅えながら交響曲を書き上げました。今回は、「怖い」をキーワードに西洋音楽史をふり返ります。

〈中川さんの本〉

『怖いクラシック』(NHK出版新書)、『カラヤンとフルトヴェングラー』(幻冬舎新書)ほか多数。

とき 11月24日(木)夜7時～9時

ところ 公民館 地下ホール 定員 85名(当日先着順)

※申し込みは不要です。ご自由においでください。

〈親子で遊ぼう・考えよう〉

新聞紙で巨大ピラミッドを作ろう & 新聞紙ドームに入ろう!

新聞紙を丸めて部材を作り、ピラミッドを作ります。自分よりも大きな作品を作る経験は、大人も子どももワクワクします。天井まで届く!? ピラミッドを親子で協力して作りましょう!

講師 山田 修平

(NPO法人東京学芸大こども未来研究所)

とき 11月27日(日)朝10時～12時

ところ 南市民プラザ 多目的ホール

持ち物 動きやすい服装、ハンドタオル、飲み物

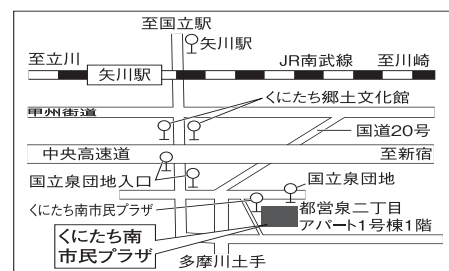
対象 子ども(4歳以上～小学生)と保護者

定員 15組(申込先着順)

申込先 11月8日(火)朝9時～

公民館☎(572) 5 1 4 1

■南市民プラザへのアクセス



※JR南武線矢川駅より徒歩15分

※矢川バス:「国立泉団地」バス停下車1分

〈哲学講座〉

長谷川宏さんと読む『日本精神史(下)』

講師 長谷川 宏 (哲学者)

ヘーゲルの翻訳や哲学研究で多くの著作を出している長谷川宏さんを講師に、今年度は長谷川さんの著書『日本精神史(下)』をテキストとして取り上げます。

長谷川さんは、ヘーゲル研究者として始まり、ここ20年は日本の文化と思想を研究されてきました。平安時代から江戸時代まで日本人の精神史を長谷川さんとともに学びましょう。

読書会の形式です。『日本精神史(上)』をお読みのうえ、ご参加ください。

〈長谷川さんの著書〉

ヘーゲル『精神現象学』の翻訳でドイツ連邦政府翻訳賞受賞。『高校生のための哲学入門』(ちくま新書)、『ことばをめぐる哲学の冒険』(毎日新聞社)、『双書哲学塾 生活を哲学する』(岩波書店)、『ちいさな哲学』(春風社)ほか多数。

※テキストの『日本精神史(下)』(講談社)をご用意ください。

とき 1月7日～2月4日(全5回)

毎週土曜日、昼2時～4時

ところ 公民館 3階講座室

定員 35名(市内在住者優先・応募者多数の場合は抽選。原則全回出席できる方)

問合先 公民館 ☎ (572) 5 1 4 1

申込方法 往復はがきの往信裏に、氏名(フリガナ)・住所・電話番号を明記のうえ、下記までお申し込みください。(はがき1枚につき1人まで。記載漏れは無効とします) ※返信用表にも住所・氏名を明記してください。

申込締切 11月30日(水) 消印有効

申込先 国立市公民館 哲学講座担当
〒186-0004 国立市中1-15-1

日本は「見える」のか？

—「異文化」としての日本と翻訳の問題—

講師 ロビン ヴァイヒャート (一橋大学大学院生*)

『菊と刀』は日本文化を説く有名な著作ですが、著者のベネディクトは実は日本をその目で「見た」ことは一度もありませんでした。一方、1964年の東京五輪の時には多くの世界各国のカメラマンが日本を「見せよう」として詰めかけました。

見たこともない異国を言葉で、映像で描く試み。未知の「異文化」を捉えようとするとき、言葉と同じく視覚的イメージもまた、「翻訳」という厄介な問題にさらされます。本講座では、初回は『菊と刀』、2回目は『不思議なクミコ』というフランスの東京五輪記録映画を取り上げ、言語とイメージもごもの「翻訳」の複雑さと面白さに迫ります。

とき 12月4日、18日(全2回)

いずれも日曜日、昼2時～4時

ところ 公民館 3階講座室 定員 35名(申込先着順)

申込先 11月10日(木)朝9時～

公民館 ☎ (572) 5 1 4 1

*一橋大学大学院生による講座

国立市内の一橋大学では、研究者を目指す大学院生が日夜研究に励んでいます。そこで公民館が架け橋となり、若手研究者と地域社会との交流講座を企画しました。最新の研究動向に触れるもよし！ 修行中の院生にアドバイスするもよし！ 院生が講師となって専門分野をご紹介します。

〈作家と作品〉

シェイクスピアの人生哲学

講師 河合 祥一郎 (東京大学)

今年、没後400年をむかえたウィリアム・シェイクスピア。彼の戯曲は、なぜ人々を惹きつけるのか。今なお世界中で読み継がれ、上演され続けている魅力は一体どこにあるのでしょうか。

河合さんは著書の中で「シェイクスピアを理解すると、ものの見方は一通りではないとわかるようになる」と述べています。日本でも親しまれている3作品を通して、シェイクスピアの人生哲学に触れてみませんか。

〈河合さんの著書〉

『シェイクスピア—人生劇場の達人』(中公新書)、『シェイクスピアの正体』(新潮文庫)ほか多数。

◆第1回：11月29日(火) 『ロミオとジュリエット』

◆第2回：12月20日(火) 『十二夜』

◆第3回：1月24日(火) 『ハムレット』

※各回で取り上げる作品を事前に読んできてください。

講座では3作品全て、角川文庫・河合祥一郎訳のテキストを使用します。

とき いずれも昼2時～4時(全3回)

ところ 公民館 3階講座室

定員 35名(全回参加できる方優先、申込先着順)

申込先 11月10日(木)朝9時～

公民館 ☎ (572) 5 1 4 1

国立市制施行50周年企画展 地域史講座
公民館・中央図書館・郷土文化館共同企画
「高度経済成長期の日本とくにたち」

講師 寺西 俊一 (一橋大学)

国立市が「市」になった1967年。高度経済成長時代の国立のまちは、急激な都市化によって大きく変貌しました。郷土文化館の下記企画展にあわせ、『国立市史』下巻にご執筆された講師に、経済と環境の視点からお話を伺います。

とき 11月23日(祝・水) 昼2時～4時
ところ くにたち中央図書館 2階会議室
定員 30名(申込先着順)
申込先 11月8日(火)朝9時～
公民館☎(572) 5141

☆関連イベント☆
郷土文化館 国立市制施行50周年企画展
「高度経済成長期とくにたち」
〈公民館・中央図書館〉ミニパネル展

郷土文化館の企画展と平行して、公民館と中央図書館でも高度経済成長期のくにたちの写真パネルを展示します。

国立市の広報担当が撮影した市制施行前後の公民館や中央図書館とその周辺の写真からは、くにたちの文教都市としての「あゆみ」を見ることができます。

各館利用時に、ぜひご覧ください。

展示期間

公民館……11月1日(火)から12月4日(日)まで
中央図書館…11月2日(水)から12月5日(月)まで

〈人権講座〉
食肉・皮革産業の「裏側」
—と畜と差別、動物と人間の関係史—

講師 鎌田 慧 (ルポライター)

動物の肉を食べること、毛や皮を服飾などに用いることは、私たちの日常にありふれています。食べる、着る、履く、装飾品から楽器まで、紀元前から連綿と続いてきた動物と人間の関係は、私たちの生活や文化と深く関わってきました。

一方、私たちの生活に欠くことのできない食肉処理や皮革産業の仕事に対する差別や偏見もいまだに根強く残っています。そうした歴史と現実を、長年にわたる取材を通じて伝えてきた鎌田さんに、改めて屠場や皮革の仕事の実態、食肉をめぐる思想と人々の意識、被差別部落の歴史と運動などについて伺います。お気軽にお越しください。

とき 11月25日(金)夜7時～9時
ところ 公民館 3階講座室 定員 35名(申込先着順)
申込先 11月8日(火)朝9時～
公民館☎(572) 5141



↑町制施行10周年記念文化祭の看板が掲げられた公民館入口 1961年11月

↓たましん階上から見た 国立駅南口広場 1964年



公民館のQ & A

このコーナーでは公民館について一問一答形式で紹介していきます。

Q 公民館1階の市民交流ロビーを利用して、グループ活動で作った写真や絵画などの作品を展示したいのですが、申し込み方法や使い方を教えてください。

A 市民交流ロビーは、市民の休憩や交流スペースとして、どなたでも利用できるように開放しています。グループでの展示として使用を希望する場合は、ロビー利用希望月の前々月第1土曜日午前10時から開催する「会場利用調整会」にご参加ください。調整会への参加方法は、他の部屋と同様です。(公民館だより5月号をご覧ください。)

市民交流ロビーは、展示の準備と撤収作業を含め、休館日を除く7日間の利用ができます。展示パネルなどは、各グループにおいて設置と撤収をしていただきます。1階の喫茶「わいがや」、南側ガラス扉出入口、車椅子用リフトと操作盤、倉庫扉前は、通行等の妨げとなりますので、パネルを設置することはできません。

また、展示中でも休憩や交流スペースとして利用できるよう、テーブルとイスのセットを最低2組は残してください。その他、詳しい利用方法は、公民館まで事前にお問い合わせください。



◆ロビーのテーブルを新調しました。
◆このテーブルは半円ずつにして展示等で利用することもできます。

ひるば

(8ページにもあります)



お祭り最高潮！
撮影 末永皓さん（富士見台）

フルート会員募集「桜音の会」

半年に一回新曲に取り組んでいきます。新しい譜面を手渡された時の戸惑い、少しずつ曲に仕上がっていく喜びは、吹いていて良かったと感じる瞬間です。

日時 第二、四火曜夜6時～8時
場所 富士見台地域防災センター
連絡先 西村(090)2640

フレスコ絵画制作講座開催

全6回で小品3点を作る美術サークル「わ」主催の講座です。講師は内外でフレスコ絵画作家として活躍の鈴蘭先生です。先着10名、有料です。

日時 1～3月の土曜日、午後
場所 公民館 講座室
連絡先 小宮(090)6974

起立性調節障害 ソレイユ

成長期に多い病気、起立性調節障害。朝起きられない、体が怠い、気になる症状はありませんか？ご家族や関係者の交流会。申込制、参加費200円。子ども無料。

日時 11月11日(金)昼1時15分～
場所 公民館 講座室
連絡先 片岡(525)7122

第22回くいしんぼクラブ

ステイールさんのベトナム料理
お得意の家庭料理を習いましょう。材料費800円。ふきんとゴミ袋をご持参下さい。

日時 11月12日(土)昼1時～
場所 福祉会館 3階料理講習室
連絡先 八宮(571)1007

シルクロード自転車紀行5

シルクロード雑学大学の会員が、西安からローマまで自転車で行った「ツール・ド・シルクロード20年計画」。熟年たちのトルコの旅の様子を写真と共に伝えます。

日時 11月13日(日)昼1時～
場所 公民館 講座室
連絡先 長澤(573)7667

くにたち国際友好会 WING

11月の異文化コミュニケーションの会は、一橋大学留学生のステラ・コエヴァさんに、ブルガリアの歴史・文化、諸事情について紹介していただきます。

日時 11月17日(木)夜6時半～
場所 一橋大学 国際交流会館
連絡先 和田(090)2110

ヘンデル「メサイア」演奏会

くにたち市民合唱団第30回演奏会。諸岡範澄指揮。佐竹由美、押見朋子、澤原行正、押見春喜ソロ。オーケストラ・シンポジオン。合唱指導石原章弘。全自由席2千円。

日時 11月19日(土)夜6時開演
場所 芸小ホール
連絡先 川上(080)6027834

墨絵の年賀状づくり

賀状に一筆墨絵を添えてみませんか。主催・西福祉館運営委員会 講師・富樫廣志(水墨画) 無料 先着20名、小筆のみ持参。

申込のご連絡は、火木土の午前。
日時 11月19日(土)昼2時～4時
場所 西福祉館 一階和室
連絡先 西福祉館(573)9926

公民館運営協議会報告

10月11日(火)第30期第24回定例会を開催。委員14名、館長、職員1名出席。傍聴者2名。
前回議事録確認

協議事項

諮問「国立市公民館の事業評価のあり方について」の答申最終案を確認し、更正や訂正、追加について議論した。

特に文言は、委員の立場でなく一般の方が読んだ時にわかりやすく、かつ正しく理解して頂けるようにという視点から再度、見直しを行った。

他に、注釈を付けるべきか、資料を添付すべきか等、活発な議論が交わされ、最終案がまとまった。
報告事項

○公民館だより編集研究委員会
10月号は市民文化祭での多彩な催しが紹介されている。紙面の組み方や編集に工夫が見られ、見やすくなっている。

○社会教育委員の会
生涯学習振興・推進計画に係る諮問についての答申の最終案の内容を更正中である。

○東京都公民館連絡協議会
9月3日の研修会の報告がなされた。公民館運営協議会委員にとって非常に意義ある研修であった。第30期公運審は10月末で委員の任期満了。次期、第31期公運審第1回定例会は11月8日(火)夜7時15分から開催。傍聴歓迎。(宮脇)

「谷保太極拳同好会」会員募集
太極拳に興味はあるけれど、私にできるかしら？と悩む前に是非体験を！初めてでも無理なく続けられる気功体操を中心に体の中心から健康になりませんか？
日時 毎週火曜日朝10時～12時
場所 矢川集会所
連絡先 長谷川(090)83037254

「谷保太極拳同好会」会員募集
世界に通用する社交ダンスを楽しく踊れるように講習。特にワルツとルンバを重点に練習します。15日を除く11月の火曜4回。
主催、社交ダンス絆。
日時 11月火曜4回昼3時～5時
場所 公民館 地下ホール
連絡先 櫻井(090)53594846

「谷保太極拳同好会」会員募集
ヨガの深い呼吸と動きで、心地良いリラクゼーションを味わいながら、心身の健康維持を目指しませんか？初心者の方、運動が苦手な方も、ぜひ一度ご体験下さい。
日時 毎週木曜日朝10時半～12時
場所 中地域防災センター
連絡先 坂井(070)53053018

「谷保太極拳同好会」会員募集
成長期に多い病気、起立性調節障害。朝起きられない、体が怠い、気になる症状はありませんか？ご家族や関係者の交流会。申込制、参加費200円。子ども無料。
日時 11月11日(金)昼1時15分～
場所 公民館 講座室
連絡先 片岡(525)7122

「谷保太極拳同好会」会員募集
お得意の家庭料理を習いましょう。材料費800円。ふきんとゴミ袋をご持参下さい。
日時 11月12日(土)昼1時～
場所 福祉会館 3階料理講習室
連絡先 八宮(571)1007

今月の公民館(11月、12月、1月初め)

*印は参加自由、他は事前申込みが必要です。

- 10日(木)夜 くにたちブッククラブ
室生犀星『蜜のあわれ』
- 23日(水・祝)昼 地域史講座
「高度経済成長期の日本とくにたち」
- 24日(木)夜*図書室のつどい「怖いクラシック」
- 25日(金)夜 人権講座 食肉・皮革産業の「裏側」
- 27日(日)朝 親子で遊ぼう・考えよう
新聞紙で巨大ピラミッドを作ろう&
新聞紙ドームに入ろう!
- 29日(火)昼~作家と作品
「シェイクスピアの人生哲学」
- 12月4日(日)昼~日本は「見える」のか?
—「異文化」としての日本と翻訳の問題—
- 9日(金)夜~ロシアを知る
- 29年1月7日(土)昼~哲学講座
長谷川宏さんと読む『日本精神史(下)』

秋風「しそば」
撮影 末永皓さん(富士見台)



しそば
(7ページにもあります)

くにたち女声合唱団演奏会

第18回演奏会を行います。明治の唱歌を合唱曲に編曲した「見渡せば」、鱒、優雅な月などの外国の歌、篠田正臣編曲による器楽曲を聴いて頂くプログラムです。無料
日時 11月25日(金)昼2時
場所 小金井宮地楽器ホール
連絡先 諸井(576) 0358

ガールスカウト東京都第146団

ガールスカウトと自然の中でゲームを楽しむ「なかよしラリー」を開催します。対象は来年年長と小学校低学年の少女です。11月25日までに秋山までご連絡ください。
日時 11月27日(日)朝9時半~12時
場所 矢川上公園(雨天中止)
連絡先 秋山(575) 2713

喫茶「わいがや」スタッフ募集

公民館内の喫茶「わいがや」では、高校生から社会人までの若者が有償ボランティアとして交代でお店を開店しています。運営主体「障害をこえてともに自立する会」。
連絡先 入山(609) 4660
huzhuzihanno@yahoo.co.jp

1月号の「ひろば」原稿締切りは、印刷の都合により
12月1日(木)夕5時です。

「ひろば」欄投稿規定

市内の団体・グループ活動のお知らせの場です。
原稿の締切りは、掲載希望月の前月7日の午後5時です(7日が月曜日の場合は、翌日の8日まで)。原則として掲載月の7日から翌月6日までのお知らせを掲載します。
所定の原稿用紙に団体名・サークル名を含めてお書きください。氏名には振りがなをふってください。
原稿用紙は公民館2階事務室で受け取るか、公民館のホームページからダウンロードしてください。また、会員募集は6ヶ月に一回掲載することができますが、紙面の都合により翌月掲載となることがありますので、ご了承ください。

〈サークル訪問②〉
民族楽器の会

日曜夜の公民館地下音楽室。取材の約束時間に若干遅れてしまい、そーっと防音のドアを開けた途端、いろいろな音が一気に噴き出してきた。楽器を演奏する人、歌本とBGMでカラオケ風にマイクを握り歌う人、はたまた部屋の一隅で仲間とおしゃべりに花を咲かせる人……既集まっていた民族楽器の会のメンバーが思い思いに楽しんでいました。



めは西洋楽器と中国の民族楽器、一緒に練習していたが、曲目や旋律などが合わず、民族音楽だけ練習するサークルを新しくつくり、活動を始めたそうだ。
中国楽器の胡芦絲や八鳥などという笛は、この日初めて見せてもらった。民族楽器の会の代表、三浦義光さんの指導で練習している。民族楽器は日本ではなかなか入手が難しく、中国に行った時に購入してくるそうだ。
11月27日に行われる市民文化祭に参加する。今年で6回目。予定演目の太極拳、中国東北部吉林省の朝鮮族のおどり、群舞なども披露して下さった。
「今年、新メンバーも加わり仲間が増えて嬉しい。これからも目標高く、楽しく練習していきたい」とメンバーの中尾美恵さん。
連絡先 中尾(080)1666
〈文・写真 龍野 瑤子〉



右:八鳥 左:胡芦絲